

## 第一話 ミーム・パウダー

10年以上が経過しても東京の景色は変わっていないかった。  
空港は人工知能による統制により、警備や作業ロボットが行き交っている。真の国民は労働をせず、国家より保護費として支給している無限の金を使い倒す怠惰の日々を過ごしている。労働は人工知能とロボットが代わりを務めていた。  
レガートは空港内にあるレストランで食事をしていた。フォークにスパゲティを絡めて口に入れる。工業製品としては優秀だが味は均一で物足りない。窓ガラス越しに景色を見た。遠くに霞んだ高層ビルが見える。  
カウンターに備え付けてあるテレビジョンには、海外でツアーをしている日本人ロックバンドの姿が遠目に映る。次いで海外で民族浄化に関わったとして、兵士を処刑する映像と解説が流れていた。映像を見ている人々は残酷な映像に憤っていた。  
机に置いてある端末が軽快な電子音を発した。  
レガートは手のひらに乗るサイズの端末を手に取り、軽くなでた。端末の液晶に連絡元が映る。端末を耳元に寄せた。「もしもし、聞こえているわ。しつこく連絡しなくても大丈夫よ」端末のスピーカーから流れる声の抑揚は薄く、機械が説明している印象があった。  
暫く経った。話が終わり、電話が切れた。耳から端末を離し、テーブルに置いた。  
レガートは残ったスパゲティを食べ終え、端末を見た。1時15分を示している。テーブルの真中にあるセキュリティ端末とカードを重ねた。電子音が鳴った。隣の席に座っていた真の国民であるスーツを着た男は、食事を終えると受け付けに行かずそのまま出た。会計の類いは顔や体温による認証から個人を割り出して自動で処理している。真の国民には会計を払う義務はなく、生活には一切の金は不要だ。何もせずとも偽の国民が肩代わりしてくれる。  
ターミナルを歩き、外に出た。真の国民専用のタクシーが行き交っている。歩道には松が植えてあり、奥に木々が見える。周辺には何もなく、風が潮の香りを運んでくる。脇に黒塗りの高級車が1台置いてある。  
レガートは車の前に来た。後部座席に搭載しているカメラがレガートを捉え、認証する。認証が完了し、自動で開いた。車に乗り込んだ。後部座席のドアが閉まった。  
『レガート・ロン様。おはようございます』声が車内に響いた。  
レガートは車載の時計を見た。1時半を示している。「時間通りに止まっているわね。予めインプットしている場所に動いて」  
『了解しました』後部座席に搭載しているディスプレイに地図が映り、現在地から駐屯地までのルートが映る。  
『空港遠距離移動に車を使うしかないなんてね。列車でも通せばいいのに』  
『県をまたいで移動には許可が必要です』  
『10年経っても過保護は変わらないのね』  
車は空港から去った。  
社内に搭載しているディスプレイの電源が入る。通信元は太陽社と映っている以外は何もない。オペレーターを含め、無知な人間が通信をする時の常套手段だ。  
『レガート・ロン博士。召喚に応じてくださり、ありがとうございます』女性の合成音声も響く。  
『日本に呼んだのは貴方ではないわ、私が車に乗り込むのを監視していたのね』  
返答はない。  
レガートは笑みを浮かべた。「貴方達の返答は分かったわ。私が何を理由に日本に来たのかも分かっているわね。では貴方達は私に何を求めているのかしら。まさかスパイじゃないでしょうね。予め言うておくけど無理よ、スパイ映画の主人公でもCIAの職員でもないんだもの」  
『概要を説明します』映像がリブラのカーネルの図式に切り替わった。リブラの処理階層のうち、外部からのデータをフィードバックする部位が全国各地に拡散している映像が流れる。  
『リブラは日本国内にある事象を解析し、適所に分散して人工知能で処理して集積するシステムを採用しています。回収を行っている特定の部署にて、回収不能のバケットが発生しています』リブラが回収しているデータを拒否している流れ図が現れる。  
『よくある話じゃない。取り上げるデータは無限じゃないのよ。たかが不具合一つに私を呼ぶなんて、基礎レベルで落ちてるのね』  
『リブラは通常、回収不可能と判断した場合類似するデータの型を取り、自ら修復してコピーして回収する機能を持っています。また、瞬時に鍵を取り自ら作成して解除する機能を持ちます。現在拒絶しているデータはデータの方すらも拒む程のファイアーウォールがかかっており、更にリブラ自身が作成した鍵が不定形のため、データの回収ができない状態にあります。あなたに頼みたいのは』  
『詰まっているデータを回収する流れの作成と、無限に鍵を作って型を取るエラーを直してくれって訳ね』  
『はい』  
レガートはため息を付いた。大した内容かと踏み込んだが、実際には人工知能のプログラムエラーの修復を頼んだだけだ。魔道力学とは程遠い。解析も原因も分かっているなら、魔道力学と関係なくエンジニアを呼べばいい。「魔道力学となんの関係があるの」  
『リブラ側が明示したデータ、拒絶するファイアーウォールの元が、太陽社が管轄している場所の駐屯地です。別個のシステムで制御しているとなれば、リブラと同等のシステムで制御している可能性が高いです。となります』  
レガートは話を聞いていく。話の概要が読めてきた。リブラと同等のシステムが駐屯地で動いているとなれば、リブラ同様に蜘蛛の巣のごとく広がっていく危険がある。日本各国を制御しているリブラを脅かすとなれば、反日の可能性が否めない。故に解析し、リブラを通せと命令しているのだ。かと言って、駐屯地側の人間に通せと言っても素直に通す訳がない。10年前の計画が続行しているなら、駐屯地で遂行している計画は国家の方針に歯向かいかねないからだ。仮に反目していたとしても自分は中立たず、何も言い出す気はない。  
『概要は以上です』  
『報酬でもくれるのかしら』  
『国家を正常にすれば、相応の対応は致します。吉報を期待しています』通信が切れた。  
『ひどいものね、東安部一つも制御できないなんて』レガートはため息をついた。軍部の暴走を食い止めなかったが故に国家を揺るがす事態になったのは、過去の歴史から見ても分かる話だ。日本は上の人間ですら教養を失ったのか。外の景色に目をやった。田舎の光景が窓を通して見えた。  
駐屯地に着いたのは4時間後の夕暮れ時だった。

家屋の構成は、日本を離れた10年前から変化はない。想像力が働いた想像家は10年、20年先の未来をあたかも数百年が経過したかの如く、破格のユートピアとみなして描いた。実際には人間の10年は余りに短く、意外に変化は少ない。

車は駐屯地の前に来た。東安部の隊員が近づいてくる。車の中にレガートの姿を認めた。ゲートが自動で開き、車は駐屯地に入った。

駐屯地は一つの町を形成できるほどの敷地で、東安部が管理している。10年の間に東安部の権力は大幅に拡大した。世界で最も戦場に派遣している組織でもあり、見返りとしての外貨が貴重な収入源になっている。

魔道力学は一部の分野を科学として編入した。再現性が確立したためだ。他の国家も魔道力学の研究を表に出してきた。日本の有意さは薄くなり、外貨を稼ぐには難しくなった。国家の収入は魔道力学関連と海外派遣のマージンで成り立っている。何も生産しない国家の典型だ。

レガートは駐屯地内に転がっている輸送者と二足歩行戦車をガラス越しに見ていた。一人乗りの戦車で、細長い弾丸に近い形状に複数の砲と太い脚部が付いている。脚部は折りたたんで無限軌道を出す機能があり、自動車とほぼ同じ速度での移動を可能としている。敷地の中央付近には2階建ての建物が立ち並んでいる。高いと目標になりやすく、倒壊の状況によって被害が拡大するので駐屯地は2階までしか建てない規則がある。道路は地下に向かっていく。

車は道路に従い、地下に入った。地下通路は黄色のナトリウム光を模したLEDの照明が一带を照らしている。駐車場と行き来するだけの通路で、螺旋状に最深部まで向かう構造になっている。最深部の駐車場に入った。白い光が天井から差している。空いている場所に停車して、ドアが開いた。

レガートは車を降りた。入り口に入り、ゲートを通る。セキュリティゲートは10年の間に変わった。予め登録していれば壁に付いたセンサーが自動で顔や体型から対象者を判別して自動で通過出来るシステムになった。警備の人間は不要になった。代わりに不審者だと認識すれば、天井や壁から機関銃が現れて、相手を一瞬で肉の破片へ調理する。

廊下を通り、ロビーに出た。

ロビーは体育館程の空間にテーブルと椅子が並んでいる。テーブルごとにディスプレイと操作用のコンソールが立て掛けてある。調理機能を持った食料品の自動販売機が端に並んでいて、窓をもした壁掛けのディスプレイには景色が映っている。空いている隊員が休憩している。

レガートは周囲を見回した。テーブルに座っている隊員の一人がレガートに気づき、手を上げた。隊員の元に向かった。

隊員は女性で、黄色混じりの髪を肩につく直前の長さで留めている。

「外は変わってないわね」

「上の人は外にばかり目を向けて、内には関心がないのよ」

レガートは苦笑いをした。国内の魔道力学による売上は頭打ちになった。基礎研究ですら海外からの輸入に頼った為、日本はタダの理科室に成り果てた。代わりに東安部の海外派遣により稼ぎを得る手段に出た。偽の国民は真の国民を上回るペースで増えていて、人口バランスの管理が問題になっていた。余った人間を海外に派遣の名目で追い出すのは、人口を適度に減らす手段として非常に有効だ。上の人間が興味を持つのは、国家の生産と消費を担う者が出ていくのを引き止め、飼い殺しにするかだけだ。現に上層部は、切り離している東安部を手中に収めるのを求めている。「私を直に呼んだのには理由があるでしょ」

「司令に聞きなさい。呼び出したのは私ではないわ」隊員は席を立ち、休憩室を出た。レガートは後に続いた。

廊下を出て、駐屯地の奥にまで移動した。豪華な両開きの扉が突き当たりにある。隣に会議室と記述があり、認証用センサーとカメラが設置してある。

隊員は会議室のセンサーに手を触れた。認証が完了し、電子音が鳴る。扉が開いた。

扉の先には机が並んでいる。机の上にはディスプレイとコントロールパネルが乗っている。先には男が座っている。男は肩や胸に勲章や階級章を付けている。男の両脇には護衛の隊員がついている。

男は立ち上がり、レガートに近づいた。脇にいる隊員も続いた。「よく来てくれた、レガート博士。私は三神と言い、駐屯地内を直轄している」三神を名乗り、手を差し出した。

レガートは握手をした。「用件は聞いているわ」

「大まかにだな。詳細は今話す」三神はレガートを席にまで案内した。

レガートは三神の案内で席に座った。

三神は対面する形で座った。「飲み物は何か良いかね。アメリカ人だからコーヒーか」

「夜には飲まないわ、カフェインには弱いよ。ココアで十分よ」

三神は脇にいる隊員の方を向いた。「では用意しろ、私も同じものを」

隊員は頭を下げ、会議室を出ていった。

三神はテーブルの中央にあるコンソールを手に取り、ディスプレイを起動した。レガートのテーブルに置いてあるディスプレイも起動した。

ディスプレイにはメニュー画面が現れる。

状況を示すアイコンが開き、駐屯地内の状況を示した。立体地図と重なった情報網が映る。神経を模して、外部とはゲートを介して駐屯地外を含めた国を管理するリブラと接続している。ゲート内には過剰とも言えるファイアーウォールが存在し、外からの情報を遮断している。駐屯地内の人工知能はズベン・エル・ゲヌビと記述してある。駐屯地内の地下にある中央ターミナルで一括管理している。異常を検知すると即座に切り離し、他の部分を持って修復をするリブラと異なっていて、旧態じみた管理をしている。

レガートはズベン・エル・ゲヌビが存在しているのに驚いた。魔道力学により構成した人工知能で、人間の魂とリンクしている。日本を離れてから調査をしても、不明としか出ていなかった。リブラは日本国内外を問わずに情報を集積する傾向があるため、リブラにアクセスしても出ないとすれば、存在しないも同然と判断するのは自然だ。存在しているとすれば、リンクしている元が存在する。

「リブラからのデータの混入やズベン・エル・ゲヌビからのデータ抜き取りは出来ないシステムになっているが、侵入を試みた形跡がある」

「知っているわ」レガートは簡潔に答えた。車の中で通信してきた輩の言動から、リブラはズベン・エル・ゲヌビに手を伸ばしているのは容易に把握している。ディスプレイの表示によれば、ズベン・エル・ゲヌビはリブラへのアクセスを遮断している。影響も汚染もない。「箱の中身を見ていないけど、外の輪郭から鍵の形を把握するのは時間の問題よ」

「型から情報を推測し、取り込んだ形跡がある」

ディスプレイの表示が切り替わり、リブラが判断したデータのログが偽の国民と真の国民の人口比率と共に映る。共に映っている件数では中立の判断をしているが、内容は人口比率に比例して偽の国民の側に若干偏っている。

先進国にいる人間は生存や継承のリミットが長いので、自らの技術を人ではなく物体に残す傾向がある。故に子孫を残す行為に労力を傾けない。対して途上国側は技術を継承するのに必要な物体が存在せず、常に淘汰や死により消滅する恐怖がつきまとっているため早めに子を作り、素早く継承する。先進国全般が少子で、途上国の人口が増えやすい理由の一つで、真の国民と偽の国民でも傾向が現れている。

データの決定を示すログでは、本来人権がない偽の国民側を補強する内容が目立つ。既に恵まれているために伸びしろがなく、与える意味がないと解釈出来る。

「リブラの判断に影響を与えていると」

三神はうなづいた。「リブラが栄養としている情報は、真の国民に有利になる仕組みになっている。でなければリブラ自身の制御ができる人間がいなく鳴るからな。自力で飯が食えん子供は、親に文句を言える立場になく甘える」

「有利な情報を突き放して反発しているのは、ズベン・エル・ゲヌビのミームを再現して情報として取り込んだから」

「最もな仮説だ」

「ズベン・エル・ゲヌビは優秀な人工知能よ。でもね、集合体ではなく一人の人間の魂とリンクしているに過ぎないの。たった一人の言動に左右するほど、国家を担う人工知能は脆いかしら」レガートは明瞭に言い切った。一人の人間の意見を聞いただけで政策を簡単に変えるなど、無能な独裁者が政治に関心のない木偶以外にありえない。リブラは個人の意見を無視して過去のデータを参照して決定するため、一人の人間の意思に耳を傾けない。

「私に人工知能診断を求めて日本に呼んだのではないでしょ」

隊員がココアの入ったカップを持ってきた。二人のテーブルに置いた。

「リブラが手を伸ばして以降、ズベン・エル・ゲヌビは外に向かっている。リブラですら防ぐファイアウォールでも限界なまでに強固にな」三神はカップに口をつけてココアを飲んだ。「リブラを介して外を知ったのか、何かしらの融合を望んでいるのかは分からん。何かを知った可能性があるが、接触や汚染の影響はなく、芦原自身にも兆候はない」

「私に心療療法士になれと」

三神は黙った。人工知能は元来、人の代弁を快適にするツールであり、ズベン・エル・ゲヌビもリブラも人では限界があるという理由から開発した経緯がある。想定外の事態は設計時に検討し、実際に発生した時点で止めるのが基本だが、双方ともに人が設定した限界がない。何が起きても対処療法は出来るが、自ずとできなくなる時が来る。

「見えない影響をリブラとサンセベリアを始めとした、可能性のある要素を徹底して洗い出せ。魔道力学に通じていなければ息詰まるから、私を呼んだというわけね」

「人の魂への影響をまともに調査できる人間はいないからな。他にも理由はある」

「理由ね」レガートはカップ二口をつけた。甘ったるいココアが喉を通る。

ディスプレイがサンセベリアと称する機械とのリンク状況に切り替わる。エネルギーの経路と仕様が映る。レガートは眉をひそめた。「矛盾しているわね」

「エネルギープログラマーと呼んでいる。仕様の段階だが、効果は他の兵器を圧倒する。起動後にサンセベリア自身も制御不能に陥るのが欠点でな。魂のみでの制御を可能とするためにも、エネルギーに変換する仕組みを求めている。魔道力学に精通した君ならと見込んでる」

「出来ればね」

「詳細は現場で聞くといい」

三神はコンソールを操作してディスプレイのスイッチを切った。

「重大な話だけど、移動中に政治結社からコンタクトがあったわ。リブラが介入出来ないのに苛立っているわよ」

「リブラを介してデータを抜き取る気か」

「軍はシビリアンコントロールが基本よ、不可解な穴を取り除きたがっているのよ」

「ズベン・エル・ゲヌビは人の魂でもある。魔道力学ですら解析出来ないのに、無謀だな」

レガートは席を立った。「サンセベリアと芦原沙雪の居場所は」

三神は隊員に目をやった。隊員は頭を下げた。「案内しろ」

隊員はレガートの元へ移動した。「ご案内します」会議室を出た。

レガートは隊員に続き、会議室を出た。

「政治結社と通じていますね、問題を起こさねばよいのですが」

「ズベン・エル・ゲヌビは魂だ。分割もコピーも出来ない。リブラの介入を助けるにしても、システムの破壊は人を殺すも同然だ。一介の魔道力学者はとても出来んよ」三神は残ったココアを飲み干した。

レガートは廊下を出てエレベーターホールに向かった。ホールと言っても物資搬送の為のスペースで、電気式のフォークリフトが散乱している。

開きっぱなしのエレベーターに入った。簡素なコンクロートの壁で、物資を搬送する為にオフィスの一区画に匹敵するスペースがある。隊員がボタンを押した。モーターの動く音がして壁が上

がっていく。次に冷えた空気が下から湧いてきた。

レガートは下から上がっていくコンクリートの壁を眺めた。照明が壁に直付になっていて、一帯を照らしている。

扉と出入り口が重なった。エレベーターが停止した。

扉が開いた。

一つの庭園が入る程の空間が広がっている。50メートル程の深さで、ギャラリーと足場が多層に、かつ螺旋状に重ねている。中央には15メートル程の高さをした、緑を基調とした装甲を付けた人型ロボットが設置してある。ハッチが開いていて、無数のケーブルがギャラリーに置いてある計器類につながっている。人々が忙しなくギャラリーを歩き来している。廊下がオフィスビル内の如く囲んでいて、中央の空間とはアクリルガラスと壁で遮っている。

レガートはアクリルガラスを通して中央を見る。「APWね」驚きの表情を見せる。

「サンセベリアと言って、制御系統にズベン・エル・ゲヌビを使用しています」隊員は廊下を歩く。レガートが続いた。

突き当りにドアがある。隊員がドアの隣りにあるセンサーに手をかざした。静脈と指紋を読み取り照合する。ドアが開いた。

先は制御室になっている。司令室に似たレイアウトで、置いてある計器類は若干古く、取り掛かる隊員も若者から外れた年齢の者がほとんどを占める。壁一面に張り付けたディスプレイにはサンセベリアの状態や操縦席の状況を始めとするデータが映っている。

レガートは映像の一つに目を向けた。操縦席内で沙雪が座っているのが見える。プロテクター状の筋電位を読み込むセンサーが四肢に被さっている。隣には筋電位の状況と、沙雪の目線で操縦席内を介して見えるVRの景色が映っている。景色は駐屯地の外の世界が映っている。

「筋電位で動かすなんて、アナクロなのね。ズベン・エル・ゲヌビと魂をリンクしているのだから、コンソールを介さないくても問題ないでしょ」

「ノイズがかかりやすいので、人工知能のフィードバックや対話用に割り切っているのよ。イメージ通りに動かすのは危険だって、貴方ならよく分かるでしょ」

レガートは黙った。生物は無数の情報を同時に処理し、周囲一帯に存在する危険から守る仕組みだ。意図して気が散る為、集中と単一の作業を余儀なくする機械との相性は劣悪で、ダイレクトに判断すれば余計なノイズを命令と判断して実行してしまう。フィルタを介しても何が重要で、何が不必要なのかは分からない。

「何の為にリンクしているのよ、データを取る意味がないわ」

「十分あるわ、量産するにあたってはね」

「量産」レガートはオウム返しに声を上げた。いくら機械が量産できても、魂が人工知能に適合する人間は量産出来ない。10年前の計画では遺伝子改造と人工授精をもってしても2人しか見つからなかったのだ、技術が発展しても遺伝子改造は魔道力学の1分野を超えていない。大量に生産し、適正のない人間を問引くのか。「適合する人間も作るの」

隊員は首を振った。「魂のリンクは人工知能の開発で魂の適合と負担を抑え、誰でも操縦が可能にする。単一で国家を傀儡に出来る程の人工知能を搭載し、かつ異世界に飛べるまでのエネルギーを持つ。戦略兵器としては最高の条件が整っているわ。魔道力学でも他国に抜かれつつある現状では、日本にとって唯一の輸出産業になり得る金のなる木よ」

レガートはディスプレイに映るズベン・エル・ゲヌビの状況を確認した。APWのリブラの干渉を防ぐ程のファイアウォールが存在する理由だ。リブラが制御下に置けるのは日本国内しかない。

よって兵器の輸出をした時に影響が出る。切り離れた独立制御を可能とし、かつ自己完結を可能とするシステムが必要になる。「沙雪には話しているの」  
「ズベン・エル・ゲヌビは駐屯地をも制御下に置いているのよ、話さなくても分かっているわ」

レガートは顔をしかめた。  
「ズベン・エル・ゲヌビがリブラに変わって制御に置いているなら、分かるのは容易よ」  
「もう一機のAPWは」  
「不明よ」隊員は簡潔に答えた。  
レガートは隊員のそっけない返答に眉をひそめた。「話を逸らす気がしてごめんなさい、沙雪に会える」  
「会えるけど調整が必要よ」隊員は時計に目をやった。18時を示している。「今日は無理かもね」  
「分かったわ、ではホテルに戻るわ」レガートは扉に向かった。  
隊員がレガートの前に出た。「宿泊する場所は用意してあります。ご案内します」  
「駐屯地から随したくない気持ちは分かるわ。でも必要な道具を置いてあるのよ。手ぶらで仕事をやれとでも言うの」  
隊員は胸ポケットから端末を取り出した。「場所を教えてください。我々が責任を持って宿泊する部屋に届けます」  
「何が必要か分かる。下手をすればホテルの備品を勝手に持ち出す羽目になるわよ」  
隊員は黙った。

レガートは呆れた。緊急事態が絡むとはいえ、相手が滞在する場所の配慮が出来ていない。  
「案内して。明日、一緒に東京へ取りに行くわ」  
隊員は眉をひそめた。「東京、ですか」  
「当たり前でしょ、日本国内でまともな宿泊施設は東京くらいしかないわよ。外国人が偽の国民のいる場所にワザワザ来る訳ないでしょ」レガートは苦笑いをした。「行きたくないならいいわ、私一人で行くわ。明日の朝に出るから、滞在する部屋まで案内したら車と連絡をお願い」  
隊員は端末についているペンを外し、書き込んだ。書き込みが終わるとレガートに目をやった。平然とした表情をしている。

レガートは隊員と目が合った。「案内は」  
隊員はペンと端末を胸ポケットにしまい、ドアに向かった。ドアは自動で開いた。  
滞在する部屋は駐屯地内の宿舎にある。スイートルームよりも設備は稚拙だが、生活に困らない設備は整っている。地下なので窓はなく、代わりに壁一面に液晶が敷き詰めてある。壁に付いているコンソールで壁紙を自由に設定できる仕組みだ。  
レガートはベッドに横たわった。天井を眺める。シミはなく質素で飾りの類はない。次第に眠気が遅い、意識が沈んでいった。

翌日になった。  
レガートは予め隊員がチャーターした車に搭乗し、予め滞在する予定だったホテルの一室に入った。キャンセル料を含めた損害は東安部が建て替えた。荷物を取り出し、車に詰め込むと駐屯地に運び込んだ。ゲートを出る際に荷物のチェックがあるが、政治結社からの通達により臨検なくして通過できた。政治結社側から見ればリブラがアクセスできない空白地を破壊する分子とみなしているため、駐屯地に入らないと困るのだ。駐屯地に入ると滞在先の部屋に荷物を運び出して整理をした。小型の機械をまとめ、端末の電源や回線を接続して起動する。各々のネットワークに組み込み、動作や状況を確認した。ディスプレイには管制室と同じメニュー画面が映っている。一通りの確認を終えて荷物の整理に入る。

ドアが開き、隊員が入ってくる。  
「今は荷物の整理中よ、午前中は用件がない限りは入るなって言ってたでしょ」  
「用件ならあります」  
「重大なの」レガートは隊員に尋ねた。  
隊員は頷いた。「芦原三尉から直に話をと申していました」  
レガートは荷物を整理する手を止めた。「時間と場所は」  
「屋の共をと要望がありまして、正午1230に特別室でと申していました」隊員はコントロールパネルに近づいて操作をした。ディスプレイに立体の地図が映る。カーソルは駐屯地の奥にある一室を示した。

「案内は出るの」  
「ロン博士の居場所が分かれば出します」  
「なら無理ね、リストに入れておくわ。彼女に私の連絡先は入れて」  
「回線を接続していれば、検索で引っかけます」  
レガートは片手を軽く上げた。「用件ありがとう。続きがないなら出て行って」  
隊員は頭を下げて部屋から出ていった。  
レガートは荷物の整理を続けた。  
荷物の整理が終わり、部屋を出たのは正午だった。当初は完成していると聞きつけたサンセベリアと沙雪の状況を確認しに現場に行く予定だったが、時間がないので寄り道をせず特別室に向かった。

端末に映る案内を頼りに、駐屯地の敷地を歩いて特別室のある棟に向かった。等の入り口には隊員が警備をしていて、ゲートが設置してある。ドアを通過する際に簡易ながら対象者の体型や顔つきを読み取り、データベースを参照して照合する仕組みだ。レガートはゲートを通過する。電子音と共に、認証が完了したランプが光る。

レガートは棟に入り、廊下を歩いていく。  
廊下は白を基調としながらも所々薄汚れている。カビではなくホコリが付着していた。  
レガートは端末の表示通り、階を上がり奥の部屋の前に来た。女性隊員が扉の前で待機している。  
「レガート・ロン博士ですね」  
「見れば分かるでしょ、他に来る人がいて」  
「了解しました、先に芦原沙雪三尉がお待ちしています」女性隊員は丁寧な口調で扉を開けた。応対から、軍属ではなく外部から呼んだメイドの印象を受ける。  
レガートは女性隊員に疑念を覚えるも、特に聞いても意味はないと判断して部屋に入った。  
部屋は廊下の印象と異なり、清潔な洋室だった。中央にテーブルがあり、簡素な食事が盛り付けてある。ディスプレイもコントロールパネルもない。  
先には褐色じみた肌をした、肩まであるつややかな黒い髪をした少女が座っている。他には誰もいない。  
「貴方が芦原沙雪三尉かしら」レガートは少女に尋ねた。

「はい」少女はうなづいた。「私が芦原沙雪です。東安部東北師団に属しています」  
「素晴らしいわね、少年兵で三尉を持っているなんて」  
「名目です。機動兵器に搭乗できるのは将校からと決まっています。年齢に関しては伏せていますが」  
レガートはうなづいた。18歳未満の人間が自衛とはいえ、軍に関わっていると知れば国際問題になる。「10年ぶりね、植物園で会ったきりだけど覚えて」  
沙雪は眉をひそめた。  
レガートは沙雪の表情を見てから、周囲を見回した。表立った場所に監視カメラの類いはない。「覚えていないのは仕方ないわ、子供の記憶は曖昧に離れていくのよ」  
「単に浮かばないだけなら探せば見つかるかもしれません。記憶は随時データとして保存してますから」沙雪は自分の目の脇を人差し指で軽く突いた。  
「探す気がないなら一緒よ。記憶をたどって私を浮かべても、今の私とは別よ。同一人物か否かって意味じゃなくて、年をとって骨格から変わっているって意味でね。人は年を取るの急よ」レガートは席に座った。  
沙雪は笑みを浮かべた。「話には聞いています。魔道力学者で父の知り合いであると。ズベン・エル・ゲヌビの設計と共に、私の魂と接続する手術を担当した。ですよ」  
「双子の弟は元気している」  
沙雪は何も答えない。弟を知らないのではなく、わからないのだ。  
レガートは一息ついた。「流していいわ。話を戻すけど、私が担当したズベン・エル・ゲヌビは初期だけしか請け負っていないわ。当時担当したクルーに聞いても、同じ答えしか返ってこないのは分かるわよね。人工知能は実行してから主の指示に従って変化していくの。変わり果てた先は私も知らないわ。成長しきって独立してから、子供の進路を知って盾突く親はいないわよ」  
「いいえ」沙雪はトンガに手を付け、皿の上に乗っている料理を取った。「でも子供が過ごしてきた環境や、育てた経験を知っているのは貴方以上に知っている人はいないでしょ」  
レガートはうなづいた。まもなく扉が開き、女性隊員が飲み物を乗せたトレーを持って入ってきた。女性隊員はテーブルに来て、カップに飲み物を注いだ。紅茶の匂いと共に湯気が立ち込める。  
「タイミングがいいわね、監視カメラがないのに」  
沙雪は笑みを浮かべた。「ありますよ」自分の頭を軽く突いた。  
レガートはうなづいた。沙雪は駐屯地を統括するズベン・エル・ゲヌビとリンクしているのだから、要求を介するのは容易だ。「貴方は単に女子会を開くのに私を呼んだのではないわよね」  
「無論です」沙雪は女性隊員に目をやった。女性隊員は頭を下げて出ていった。扉が閉まった。「ズベン・エル・ゲヌビにリブラが干渉したと聞いていますね」  
レガートはうなづいた。  
「元来、リブラは干渉不可能な部分に手を伸ばしません。にも関わらずズベン・エル・ゲヌビに接触を図る為に手を伸ばしている。矛盾していませんか」  
「リブラは例外よ」レガートは簡素に答えた。リブラは日本国内である点などの簡易な条件を満たした場合、自らのプログラムとして組み込む捕食プログラムが施してある。  
「例外でも自死を引き起こす毒キノコは食べません。少なくとも知恵がある限りはです」  
「リブラは無能だと言うの」  
「いえ」沙雪は首を振った。「生物は欲に勝てません。リブラ自身を誘引する欲をズベン・エル・ゲヌビがばらまいたとしたら、矛盾は減りませんか」  
レガートはトンガを取り、手元の皿に食べ物を乗せた。「ズベン・エル・ゲヌビがリブラを食べているの」  
「私は人間レコードとして登録しているので、命令なくして一度も、いえ一生駐屯地から外に出るのはいけません。理由は分かりますね」  
レガートはうなづいた。沙雪はズベン・エル・ゲヌビと魂をリンクしている兵器の端末で、かつ本体でもある。10年以上前に触れたAPWの仕様のみまだと仮定するならば、当人のリンクを経由しない稼働は不可能なので、東安部の中に囲い込む必要がある。  
「けれど外の世界を知らねば動けと言っても動けません。故に外と接触する為、東安部が持ち込んだデータに入るので」  
レガートは皿に盛ったスパゲティを食べた。丁度よい柔らかさで茹でている。東京で食べたのとは大分印象が違う。  
「しかしながら、持ち込んだデータでは正確さに欠けます。私は自分自身の判断で外を司るシステム、貴方達の言うリブラに接触したのです」  
レガートは皿に盛ったスパゲティを食べつつ、沙雪の話の話を整理すると、大まかに言えばリブラがズベン・エル・ゲヌビと接触したのではなく、ズベン・エル・ゲヌビが外を知る為にリブラと接触している。日本国内の政治機能を統括しているリブラと、元々は異世界探索用の人型調査船であるAPWを管理する為、人工知能であるズベン・エル・ゲヌビが同じ軸で接触していて、食い合いは最小限にとどまっている。性能としては互いに同等と認めている。ナメクジと同じく、情報を交換して互いに新たな種を得るシステムを作ったのか。「リブラに接触した時の印象は」  
沙雪の表情が固くなった。「別の駐屯地に置いて、リブラと接触している別の人工知能が存在するのを確認しました。私と同系統の人工知能が存在します。父の死後に別れた暮弘と推測しています。現在リブラの戸籍の中に暮弘の名前は存在しますが接触はなく、データの変動もないので死亡に著しく近い行方不明だと認識していました。くどくなりましたが、私が貴方を呼んだ理由です」  
「戸籍、データベースと違うの」レガートは沙雪に尋ねた。戸籍と称する制度は日本しかないの、アメリカにいるレガートには理解し難い。  
「同じと見ていいです」沙雪は明確に答えた。戸籍は出生地と所属関係を示す制度で、現在の日本では真の国民を登録して各特権の配布基準の判別に使う。偽の国民は日本国民と見なしていないので戸籍に登録していない。登録しているか否かによって権利の有無や各種の区別をするのに便利なので、現在でも使用している。「戸籍に登録したままとなれば、生存している可能性はあります。けれど実際には見ていません。リブラがウソを付く理由はないのですから、私と同じく何らかの処置を受けている可能性があります」  
「暮弘を探し出して覚えてね」  
「はい。東安部は当初の計画である異世界探索計画を捨て、ズベン・エル・ゲヌビをリブラにすり替え、偽の国民を主軸とみなす為の革命に移行しています。ズベン・エル・ゲヌビをアンチリブラの切り札として利用する気なのです」沙雪は明瞭な口調で話した。「ズベン・エル・ゲヌビは既に東安部の駒に成り果ててしまいました。残った人工知能に手を付けていないのなら、別個の人工知能に本来の計画を委ねるより他にありません」  
レガートは紅茶に手を付けた。甘みはなく、既にぬるくなっていた。「善処するわ」曖昧に答えた。政治結社からの要望や東安部の依頼に加え、沙雪の依頼もこなすのは苦勞をかける。  
用件を話してからは、他愛ない話をしていた。  
沙雪は少女でありながら会話が明瞭で、レガートが時折面食らう時もあった。霊性がプログラムに適応し、かつ遺伝子改造を受けて知能増幅を図っているだけに、年相応ではない知識と順応を見せていた。ただし経験はなく、上っ面だけの知識だけなので、レガートの実践を元にした知識の前にたじろぐ場面もあった。  
レガートとの食事を終えたのは1時間後だった。既に皿は片付けてあり、空になったカップだけがテーブルに乗っていた。食べ終えた皿は女性隊員が片付けた。「有意義だったわ。ありがと。早速調べるわね」席を立った。  
沙雪はレガートに合わせて席を立ち、頭を下げた。「私こそ感謝しています。自身の内を話したのは久しぶりですから。ワガママで部屋を手配したかがあります。今日はサンセベリアの調整に時間があります。間近に見てみませんか」  
「見ているの」  
「データは直に受け取った方がいいでしょう」  
レガートは笑みを浮かべた。何が必要かを理解している。「ええ、でも勝手に動かしていいの」

「調整の名目で近づけます」沙雪はレガートの前に向かい、扉を開けた。脇に女性隊員が待機している。レガートは少女らしからぬ言動の中に、子供の部分が残っているのを察した。「サンセベリアの調整をします。アドバイザーとしてロン博士が同行しますので、共は不要です」女性隊員は頭を下げた。沙雪とレガートは棟にあるエレベーターホールに向かった。エレベーターのボタンを押すと扉が開いた。二人はエレベーターに入り、地下に向かった。地下階に到着し、扉が開くと通路を歩いてドアの前に来た。生体認証によるセキュリティゲートが設置してある。沙雪は認証用のセンサーの前に手をかざした。ゲートの上にあるランプが点灯し、通過した。レガートも沙雪と同じ動作をして認証し、通過した。サンセベリアを中心に回り込む形で無数のタラップと足場が設置してある。レガートは足場を通してサンセベリアに近づいた。サンセベリアは直立した状態で設置してある。一見すると拘束した重装甲の巨人に似ている。異なるのは中身が機械で出来ている点だ。APWと特殊なカテゴリの名前が付いているが、実際には精密機械の集合体である巨大人型ロボットではない。レガートと沙雪は回り込む動きでサンセベリアの胸部に近づいた。胸部は開いていて、内部の動力系統が露わになっていた。整備士達が調整している。レガートは調整している動力系統を見て驚いた。10年以上前に港で見た部品と構成が似ている。「胸部に駆動系があるのね。小型核融合を使っているの」隊員はレガートの方を向いた。レガートは興味深く動力系統を眺めている。「レガート・ロン博士です。魔道力学のアドバイザーとして駐屯地に滞在しています」「博士でしたか、司令から伝達を受けています」隊員は頭を下げた。沙雪は操縦席の前に来た。操縦席は自動で開いた。元々サンセベリアの人工知能は沙雪の魂とリンクしているので、意思のままに操作できる。遮断も出来ない。「動かすの」「意思があればコントロールできますが、炉は停止しています。起動するのにカロリウムボム数百基分のエネルギーが必要ですからね。確保するには現在の駐屯地だけではなく、他の駐屯地にあるカロリウム発電炉から融通する必要があります」「要は約立たずの兵器って訳ね。試験もしてないの」隊員は近くにあるコンソールを操作した。ディスプレイに縮退のデータと実験の履歴、状況を示す写真が多重に映った。「稼働試験はしています。仕組みとしては炉の内部で圧縮をかけて縮退を起こして類似ブラックホールを作成し、同時に周辺にも重力中和のマイクロブラックホールを生成して相殺して外部の影響を阻止します。縮退が発生した状態で質量を放り込んでエネルギーを取り出すといった具合です。相転移の際に発生する熱まで奪いますが、保温処理もまた縮退で対処します。螺旋状に徐々にブラックホールの重力を減らして対処していく形ですね。核融合炉を用いる案もありましたが、技術のバリエーションが高額で、東安部に割り当てた予算では確保出来ませんでした。仕方なくの対処です」レガートはデータを眺めた。「ロースクールの生徒でも分かる説明、ありがとう」沙雪は飛び出したシートに座った。操縦席に入り格納する。ディスプレイが切り替わり、操縦席の内部が映る。内部は昨日、監視室で見たのと同じ光景だ。「内部の操縦桿は脳波で読み取りトレースするタイプです」「聞いたわ。単に操縦訓練をしているの」「実際に動かさせませんからね。時間があれば訓練です。正直に話しますと彼女は他に利用手段がないのです」胸部から手を離し、回路の接続を始めた。指示があった場合に即接続して起動出来る状態にする為、起動手順と制御の手続きをしている。指示があるのは万が一の確率なので手順だけを毎日続けていた。次第にマニュアルを見ずとも回路のチェックやメンテナンスは容易に出来てしまっていた。現在では実戦の指示があってもシミュレーション特別が付かない状態だ。「少女ですし、容姿も十分ですからアイドルとしての使い道はありますよ。でも少年兵を表に出せば国連がうるさい。東安部がかつての自衛隊と同じ国防組織であって、軍隊ではないと説明しても通じませんからね。タダでさえ魔道力学の実験場としてにらんでいる状態ですから、些細な状況でも表に出すのはまずいというヤツです」レガートはディスプレイに映る沙雪の状態を見ていた。各部位の筋電位と脳波の状況が映っている。昨日見た光景と特に変わりはない。映像の中の差雪は目を閉じた。金電位の反応が極端に鈍りだす。精神統一に入った。「どいて」レガートは隊員を払いのけてコントロールパネルの前に来た。「待って下さい、三尉に直結しているんですよ」「問題があれば人工知能自身が止めるわ。古いけど魂と接続する手術をしたのは私のクルーよ。貴方よりはブラックボックスを把握してるわよ」隊員はたじろいだ。「では何を」「データを記録して。私の部屋で解析するから」「なら直にクラウドを使えば」「スタンドアロンでないと駄目よ。オンラインでは簡単にフィルタで加工できるわ。記録媒体を出して」隊員はコントロールパネルに乗っている工具入れからメモリーカードの入ったクリアケースを取り出した。メモリーカードは現在出回っている半透明でサムネイルが映る仕組みの家電用と異なり、非透明なプラスチックで出来た、10年以上前に出回っていた型だ。「仕方ないですね」「貴方が使ったのでは信用できないわ。私のを使わせてもらうけどいい」レガートはポケットからメモリーカードの入ったカードケースを取り出し、開けた。クリアケースを通して見えるメモリーカードと同じ型だ。隊員は驚いた。すでに生産完了していて、海外を経由しても入手が厳しいにも関わらず保有しているのか。レガートは他委員の反応を見て笑みを浮かべた。「軍の事情は世界中一緒よ」カードスロットにカードを入れた。入っているデータの内容のウィンドウが開く。軍事用のシステムは最新の機械を使うのは、軍を知らない人間の錯覚だ。更新する際、一瞬でもシステムが停止すると問題になるので、関連する機械を停止しない限りアップデートをしない。信頼の兼ね合いもあり、枯れた技術を使い回すのが基本だ。カードに入っているデータの内容が映る。リブラを解析したログが入っている。容量は解析したデータを放り込む分には問題ない。レガートはコントロールパネルを操作し始めた。ズベン・エル・ゲヌビのプログラムの実行ログが多重にプロットして映っている。レガートは幾重にも現れるプロットをまとめ、メモリーカードに保存していく。隊員はレガートの手際の良さに感心した。プロットを見ていくとズベン・エル・ゲヌビは自律式の制御システムを持っていて、沙雪はプログラムの穴を埋めている。一見してタダのデバッグ作業に見えるが、人工知能は穴があれば自動で埋め合わせる性質を持つ。沙雪は穴を埋めていると見せかけて別の作業をしている。巧妙に隠れているので誰一人として気づいていない。「問題でもありますか」「いえ」レガートはログを見ながら簡潔に答えた。ズベン・エル・ゲヌビの調整とAPWのシミュレーションをしているとしか見えない。モニターの中ではサンセベリアが機体に搭載してあるブースターを使用して空中を飛行している。縮退炉の出力を計測している。百分率による表示では1パーセントも出ていない。数値として換算している表示では、少なくとも見積もってもかつて存在していた原子力発電所の10基分程度の発電量は出ている。小型核融合炉を搭載しているに等しい。20分が経過した。異常な反応は特になく、検知もしない。プログラムも制御システムのコードとしては標準だ。魂とリンクしているのは素晴らしく別室なシステムに見えるが、単にキーボード

とマウスが頭の中に組み込んでいるに過ぎず、検知するにしても審査基準がズベン・エル・ゲヌビ自身なので、異常を検知するのはまずありえない。自らの体内に異常があっても、自己申告しない限り分からない。

モニターの中ではサンセベリアが着陸し、荷物の運搬をしている。一通り荷物を運び終えた状態でモニターが切れた。テストが終わった。ズベン・エル・ゲヌビの稼働状況が安定していく。サンセベリアによるシミュレーションが終わり、通常稼働に戻った。20分以上も変動の薄い状況を監視していると飽きてくる。レガートの脇に立っている隊員は睡魔からあくびをしていた。

サンセベリアの操縦席のハッチが開き、シートを引き出した。沙雪はシートから降りた。近くに待機していた隊員はシートの状況を調べ始めた。レガートはコントロールパネルを操作し、メモリーカードへの記録を止めた。ズベン・エル・ゲヌビが沙雪から離れたので、計測する意味はない。リアルタイムにモニターしたいのなら、自室で接続すればいいだけだ。メモリーカードスロットからカードを抜き、ケースに入れた。沙雪に近づき、笑みを浮かべた。「ありがとう。参考にするわ」

「はい」沙雪は頭を下げた。「次は自室にこもるのですか」  
「ええ」レガートは軽快に答えた。「リブラにアクセスして照合するけど、駐屯地内でリブラに干渉できるの」  
「バッファを介すれば出来ませんが、リブラ本体というより、リブラのデータをコピーしているにすぎません」隊員が沙雪とレガートに割って入った。  
「なら、何でズベン・エル・ゲヌビは直にアクセスできるの」

隊員はうなだれた。システムの流れは把握しているが、肝心の何故の部分がわからない。  
「リブラはすり抜けていますよ。バッファに保存していると偽装しているんです」沙雪は平然とした表情で答えた。「駐屯地内のシステムはズベン・エル・ゲヌビで制御しています。リブラの鑑賞を受けません」

「でも外のデータは必要でしょ」  
沙雪はうなづいた。「前に話した通りです。リブラ以外に外を知る手段がないので、バッファエリアにリブラのデータを保管し、都合のいいデータを抽出して利用しているんです。でもリブラはいとも簡単にすり抜けています」

「すでに鍵をこじ開けているのね」  
沙雪はうなづいた。  
隊員は驚いた。「量子キーを破るというの」

「量子キーは破れません、最初から鍵を明け渡していれば開けるのは簡単です。でなければ逆にリブラにアクセスできません」  
隊員はコントロールパネルを操作し始めた。仮に最初からアクセス可能な状態になっているとすれば、駐屯地内で進行している計画が筒抜けになっている。計画はアンチリブラの作成による国家転覆だと分かれば、駐屯地に爆撃を含めた制裁が飛んでくる。

「ズベン・エル・ゲヌビの内容は漏れていません。バッファエリアを介していますから。リブラはズベン・エル・ゲヌビ内から手に入れたミームを垂れ流しにする程間抜けではないです。フィルタを介して消しています。量子キーを使っているので人間には誰も解析できません」

ディスプレイにリブラを介した結果がリブラに映る。特に何も無い。隊員は安心した。  
沙雪はレガートの袖を引っ張った。レガートは沙雪に顔を近づけた。沙雪はレガートの耳に顔を近づけた。「実際にはズベン・エル・ゲヌビにある私のミームはリブラの中に溶け込んでいます。自分のプログラムにしているので引っかからず、量子キーで封じているので人間に解析できないだけです」ポケットからメモ帳を取り出して書き込み、レガートの手に渡した。

レガートはメモ帳を握りしめた。  
「何かありましたか」隊員は沙雪に尋ねた。  
「当初渡す資料の補足を忘れていたので、即席ですが渡しました」沙雪はレガートから離れた。「休憩します。連絡をお願いします」

「はい、三尉」隊員は声を上げた。  
レガートは隊員に手を上げた。「自室に戻るから、何かあったら連絡して」空間から出ていった。